

彙報

○京都帝國大學文學部史學科

本年度卒業論文題目

本年度文學部卒業生の提出せる卒業論文の中、史學科に屬するもの、並に他科にして史學に關係ある題目は左の如くである。

國史專攻

國學の歴史的考察

近世封建社會に於ける町人請負新田の一考察

徂徠に於ける近世文化の反省と其の意味に就いて

今中寛司

幕末長州藩の兵制と軍事

その特質と意義

封建制度編成と都市 商業都市界に就いて

世阿彌元清と其時代

近世に於ける農民生活の一考察

鎌倉時代神道理論の性格 伊勢神道の成立

末期幕府に於ける強兵政策の諸問題

藤原末期の宗教的生活

平安朝草假名書道發達の精神史的考察

福澤諭吉の文明開化論

池川 聰雄

池田 史郎

小野 義彦

岡本 良一

加藤 正巳

梶 盛孝

清原 宣雄

越川 正啓

酒見 豊

島 道雄

菅原榮太郎

聖徳太子思想の一考察

近世の行商人 越中富山賣藥行商人の場合

平安朝末期 特に六波羅時代に就いて

奈良朝美術の一考察

日本原始文化研究序説 特に銅鏡繪畫に關する二三の考察

田中 巽

近世に於ける市民的世界觀への通路 主として思想史に於ける商業資本の問題

近世初頭に於ける庶民文化

近世初頭の歴史的考察

近世初期の農民政策に關する一考察

徳川時代後半期の思想

近世初頭に於ける遊藝の研究

山崎闇齋の神道思想 近世神道の性格

浄土教確立の精神に就いて 特に法然親鸞を中心としての考察

初期茶道序考

江戸時代町人階級と石門心學

奈良朝前期に於ける統一國家の進展

東洋史專攻

清代廣東省に於ける農商の基礎的一考察

紀元前後に於ける Kashmir 史の一考察

唐代兵農分離の一考察

清

近岡 七郎

寺脇 慶一

東郷 松郎

鴫田 忠正

奈良本辰也

西川 光一

錦田 眞和

原田 種美

林 敏雄

林屋辰三郎

藤江 正路

藤谷 惺

堀内他次郎

水野恭一郎

八木 茂美

澄田 正一

立花 憲二

原田 清

西洋史專攻

Colonat

鹽月 倫

Norman Conquest 以前の土地所有關係に就いて 島田 武雄
西曆一八四八年のシユレスウイヒ・ホルスタイン兩國國
民の興起に就いて 高世日出男

伊 利統一運動の考察 主として國內狀勢を中心として
中臣 惠曉
野末 良平

時代

地理學專攻

天草諸島の人口 人口の地理學的意義についての一考察
伊藤 博

三島群島の人口に就いて 佐伯 英二
臺灣北部の茶に就いて 下村 數馬

北攝の經濟地理學的研究 中森 增三
出雲海岸地帯の水産地理學的研究 並河 由則

臺北市の地理學的研究 西村 陸男

考古學專攻

歐洲舊新兩石器時代過渡期文化の問題を中心として
藤岡謙二郎

文學科

『法王帝說』考—その成立年代に關する試論— 秋山 嘉久
中世以前の歌文に於ける古歌引用に關する研究 植村 文夫

尾田 卓次

萬葉集古寫本に於ける校合書入に就いて—仙覺本にあらざ
る諸本を中心として— 小島 憲之

新古今和歌集の史的展開上に於ける形態の考察—切繼歌を
中心として 承元三年本及び四年本について— 鯉田 榮一

京極爲兼と玉葉風 里井 陸郎
古事記に於ける文字使用上の一考察—所謂異字同訓の文字
を中心として— 森川 富治

古今著聞集に現れたる時代相並びに其批判 守 倉 正 三
尙書古文の偽作に就いて—岡澤邸先生疏證を主として— 岩田 兵三

哲學科

ヱイコの「永遠の理想的歴史」 姉崎 正 臣

ドイツ市民社會成立過程期の歴史哲學に於ける「民族」の觀
念に就いて—特にヘルデルを中心とせる— 永島 孝雄

茶 道 加藤 亮 璋
カントの歴史觀と教育 西田 猖 之 介

日本洋畫史考 田邊 彦 郎
中世ドイツ都市の社會學的一考察—中世都市の構造とその
共同社會的特質— 中野 六 郎

國家の發生に就いて—族制國家より身分國家への變遷に就
いて— 藤田 二 郎

以上

○京都帝國大學史學科本年度講義題目

正 科 目

普通講義

原 教 授

史學研究法

一週時間

國 史

普通講義

西田教授 國史概説(第一部)

特殊講義

中村助教授

國史概説(第二部)

特殊講義

西田教授

日本近世文化・文化史實習

牧(法)教授

日本封建社會の法制

藤 助教授

中古の社會と思想

喜田講師

古代史の特殊問題

魚澄講師

室町時代の政治と社會

三品講師

朝鮮史

出雲路講師

有職故實

演 習

西田教授

最近に於ける國史學の諸問題

東洋史

普通講義

羽田教授

東洋史概説(第一部)

特殊講義

那波教授

東洋史概説(第二部)

羽田教授

明清時代の中央亞細亞史

那波教授

五代の文化史的考察

宮崎助教授

近世南方交通史(第二部)

石濱講師

西朝に於ける東洋學の發達

安部講師

宋元社會史上の特殊問題

田村講師

契丹史の研究

演 習

羽田教授

東洋史の諸問題

那波教授

東洋史の諸問題

西洋史

普通講義

原 教 授

西洋史概説(第一部)

特殊講義

時野谷教授

西洋史概説(第二部)

原 教 授

時野谷教授

ビスマルクと「クルツ・ア・カンフ」

鈴木講師

希臘政治思想史

中世に於ける資本主義の起源

岡島講師

時野谷教授

埃及第十八王朝史

演 習

原 教 授

第十九世紀西洋史上の重要問題

地理學

中村(理)教授

地理學通論(第一部)

普通講義

小牧教授

地理學通論(第二部)

特殊講義

小牧教授

二十世紀の探險

小野講師

地圖書特論

室賀講師

日本地理書解題

池邊講師

地形學

演 習

小牧教授

地理學の諸問題

小牧教授

地理學實習

梅原助教授

考古學概論

特殊講義

梅原助教授

日鮮考古學

水野講師

支那考古學(漢より唐に至る)

梅原助教授

東亞考古學の諸問題

演 習

梅原助教授

日本精神史概説

日本精神史

西田教授

近世に於ける古代の理念

普通

高山助教授

近世に於ける古代の理念

演 習

梅原助教授

日本精神史概説

普通

西田教授

近世に於ける古代の理念

副 科 目

| | | | |
|-----|---------|---|----|
| 國史 | 中村助教授 | 日本古文書學概論 | 2 |
| | 藤助教授 | 國史史料講讀及び實習 | 2 |
| | 柴田講師 | 日本近世史料講讀 | 2 |
| | 宮地講師 | 神祇史 | 20 |
| | 赤松講師 | 神事の研究 | 20 |
| 東洋史 | 羽田教授 | 東洋史籍講讀 | 1 |
| | 宮崎助教授 | 同 (第二學期より) | 1 |
| 西洋史 | 時野谷教授 | Ranke: Ueber die Epochen der neueren Geschichte | 1 |
| 地理學 | 小野講師 | 獨逸地理書講讀 | 20 |
| | 室賀講師 | 佛蘭西地理書講讀 | 1 |
| 考古學 | 清野(醫)教授 | 考古學獨書講讀 (第二・三學期) | 2 |
| 美術史 | 源講 師 | 大和繪の展開(折學科講義) | 2 |

○史學研究會

例會 二月五日(土)午後一時半より文學部第八番教室に於て開
催 左の如き講演あり、聴衆約百五十名、近來稀なる盛會であつた。

- 一、イェス傳の史料 文學博士 山谷省吾氏
(全文次號に掲載の豫定につき梗概を略す)

- 一、支那最古の人類 醫學博士 清野謙次氏

私は主としてシナントロポスに就いて語りたい。人も知る如く *Shanthropus pekinensis* は河北省周口店の石切場から發見され今も發見のつゞいてゐるものである。既にアンダーソン博士は一九一八年以來この地附近の化石層に興味をもつたが、人

工遺物は發見されなかつた。處が廿一年以後 *Neubauer* 博士はこの洞窟發見物整理中人類の齒牙を發見し、ア博士はこの事實を始めて廿六年十月瑞典皇太子が、我が國からの歸途北京を訪問された時發表してから、いよいよ興味が高まり、遂に遺跡の調査發掘がロックフェラー號學資金の下に、廿七年から、北京の地質調査所と協和醫學校の D. Black 博士の協同のもとに開始された。かくて廿九年には斐文中氏は有名な第一號頭蓋を發見するに到つたのである。それ以來今日まで完全に近い頭蓋は七個、齒牙は二百個以上も出てゐる。この洞窟は堅い石灰岩であるから、今日ではダイナマイトを使つて發掘し、北京へトラックで送り、後ゆつくり、その中から、マンマル、石器、人骨を取り出してゐる。この仕事は北京の地質研究所でやる(標本供覽)。石器はむしろ原石器に似てゐる。歐洲の彼の握り槌に比せば全く石器かどうか不明な位である。石質は大部分石英で硬砂岩のものなど稀にある。骨器も見出されてゐる。さて北京人類とはいへ、學術的には *Homo* とは言へぬ。 *Shanthropus* で直立して歩く類人猿とでもいふべきである。これ以外の直立猿人は有名なジャバの *Pithecanthropus* と近頃發見された *Javanthropus* *loensis* がある。おそらくこの頃地球上にもつと廣く同種のものが分布してゐたと思ふ。所が近頃周口店の上層から舊石器人骨に相當する三つの *Homo* が出てゐる。その中の二つの頭蓋は、よく似、他は別で、かのネアンデル・タールの骨相を有してゐる。前二者を研究した *Vademecum* 博士はこれが、日本の

石器時代のものに似てゐないか。又この中の一は子供の時に頭に布をき頭蓋を變形せしめた風があつたと思はれるから、東亞の新石器時代のものと關係を有するのではないかと述べてゐる。が今日では氏の意見を受け容れるにはなほ時期尙早と言はねばならず、未だこれと日本石器時代のもの或は彩色文化人のものとの關係は具體的には不明と云ふの外はない。かくて博士は幻燈に依つて一々の物を示し興味深く論ぜられた。(藤岡)

なほ當日は上記講演の外、特に清野謙次氏所藏品の中から、次の四點の出陣を請ひ一般來會者の觀覽に供した。

一、古語拾遺 一卷 紙本墨書

今日まで知られてゐる古語拾遺の最古寫本は、吉田子傳家に傳はる嘉祿元年二月廿三日の奥書のあるものである。この古語拾遺には、それより稍下る曆仁元年八月十一日の奥書がある。更に注意を惹くことは、本文の大部分に互つて片假名で讀みが付してあることで、その研究の結果は、恐らく從來の讀みに對して多くの問題を提出するものとして期待される。

(吉田家本奥書)

嘉祿元年二月廿三日、以左京權大夫長倫朝臣本、書寫了、
奥記云、保安五年閏二月四日丙申、見合主計頭師遠朝臣本
了、猶有訛謬、尋訪證本、可決眞僞、吏部侍郎在判
與賞貢士、讀合了

翌日校點了

祠部員外郎(花押)

比較證本了、同二廿六

累祖相傳本、聊示靈異、輒難披閱、仍細々爲了見、以他本所書寫也 卜兼直

(清野家本奥書)

曆仁元年八月十一日、於光壽院書寫了、覽^(カ)之

書本云、借取或歌仙之秘本、所寫也、穴賢^(カ)、不及他見者也

愚推之所及、若登蓮秘本^(カ)

一、北野天神繪卷 三卷 紙本彩色

天神繪卷には、北野神社に藏されてゐる根本縁起を始めとして、多くの諸本がある。この北野天神繪卷は、これ等の諸本に對して、云はゞ岩松本とも云ふべきものである。奥書によれば、岩松宮の比丘良仙なるものが勸進聖となつて造進したもので、時に貞治六年十二月上旬であつたことが知られる。

圖柄は大體に於て、前半は根本縁起の簡略化されたものであり、後半は弘安本の系統をひく松崎本と類似してゐるが、色彩その他の技巧には洗練されてゐない所がある。

この北野天神繪卷に就いて注意すべき點は、詞書が片假名混りであること、及びその文體、内容が極めて古様であること、この點は、詞書の系統を考へるに際して重要な資料を提供する。更に奥書に、「縦ひ權門強縁の借用たりと云へども、他所に造すべからず」とある點、これ又松崎本第六卷の奥書と軌を一にするものであるが、共に繪卷が神物として取扱はれてゐたことを示すものとして、注意さるべき事柄である。

(上巻奥書)

岩松宮 常住

右於彼畫圖者、曾以郷内之外、不可出之、縱雖爲權門強縁之借用、不可遣他所、若於此規式被破之人々者、方天神之御素意可奉違背者也、方今尺木寸鐵之語輩、一紙半錢之賈賤、併以少因大果在家出家、共預天滿大自在天神之加被、二世所願悉可令成就圓滿、爰七旬愚老良醫、不怖冥顯之牌、不憚後見之嘲、此繪詞駢畢、只偏云本地云垂迹、爲生々世々値遇頂戴也而已

于時貞治第六曆_末大呂上旬之候畫功終了

勸進聖比丘良_良圓_圓十萬二

一、成唯識論述記卷第十 一卷 刊本
(中卷・下卷の奥書も、大體は上卷のそれと同じ。)

わが國の印刷史の最初に來るものは、有名な百萬塔陀羅尼經で、その開版は神護景雲四年のことであつた。平安朝に入ると、密教の聖教秘傳の思想の影響等もあつて、開版事業は一時中絶したが、中期頃から摺供養の風が行はれると共に、開版事業も亦復活して來た。

その先驅をなすものの中で、確實な年紀を持つてゐるものは、寛治二年正月廿六日に開版された成唯識論(正倉院藏)である。この成唯識論述記は、それに次ぐ年紀を持つもので、識語によれば、元永二年の開版であることを知る。

(奥 書)

鉤指之寺法相之徒、往年結構鑿論模焉、然疏燈闕而有恨、半珠得而無足、爰去天永中庚寅之年、學家齋議、令刻義燈、

送三載之歲、畢七軸之功、同四年癸巳、更傳彫疏模、於時僧祇之財、爲法竭矣、至于元永中己亥、經七年營方了、模版四百餘枚、鑿匠八九許輩、如履天工、神而又妙也、贊曰
淨唯識疏二十軸 文振玉譯模正成
山塔諸僧盡貨意 金鑿三衣可殘 (嵐)
四社靈仙矧彼志 百本述主感其誠
廻斯福聚施含願 願共不退大乘行

模工僧延觀

一、御裳濯川和歌集 二卷 紙本墨書

この和歌集は、鎌倉時代の初め、荒木田氏出身の寂延法師なるものが、神宮關係の和歌を採録したものである。その寫本としては、從來は近世のものしか知られてゐなかつたが、これは、紙背文書の年紀の示す所によれば、延慶二年を相距ること遠からざる時、河崎延明なるもの手になつたものであることを知る。採録されてゐる和歌は、荒木田氏の人々、度會氏の人々の詠じたものが多い。その他には西行法師の詠じた和歌が五十四首採録されてゐるが、中には勅撰集に採録されてゐない未知のものも若干ある。猶又紙背文書も、斷片的なものながら、鎌倉時代の末の神宮關係の史料を提供するもので、河崎延明に宛てた消息、神宮に關する記録等を含んでゐる。

(下卷奥書)

右御裳濯和歌集者、寂延法師之所撰、而五禰宜延明神主眞蹟也、延明神主河崎立之祖先也、先君、延貞神主幸得之干故家、惜哉失其冬已下卷、然而使延明神主之手澤、宛然在

于目、子孫可什襲以珍玩焉、至十禰宜延純神主、傳諸家也
今寫一本、又藏予家、因重其所自云

元文元年初穂二十一日

從四位上度會常影書

○讀 史 會

例會 一月廿七日(木)午後六時より樂友會館第一號室に於いて
開催。三回生中一部諸君の卒業論文内容發表、及び中村先生の講演あり。十一時閉會。當日の演題及び講師は左の如くである。

一、林間湯茶に就いて

一、銅鐸我觀

一、鎌倉時代禪道の性格

一、金剛寺發見の清水寺縁起と大祓詞

三回生卒業論文發表會

第一回 二月四日(金)午後一時より第一教室に於て開催。水野

恭一郎、林屋辰三郎、池田史郎、原田種美、田中 巽、今中寛司

の諸君の發表があつて同六時閉會した。

第二回 二月九日(水)午後六時より陳列館貴賓室に開會。藤

谷 惺、島 道雄、池川聰雄、小野義彦、岡本良一、奈良本辰也

の諸君の發表を聴き九時半終了。

右の中その梗概を寄せられた諸君のものを左に掲げやう。

初期茶道序考

日本に於ける喫茶の傳流は古きに遡り得べく、また我が遠き祖

先の生活に、早く茶事茶湯が完整され、實定化されてゐたことも

堀内他次郎

考へ得るが、特に、道を今日の我々のものとして與へたに就いては、全く珠光より紹鷗・利休等に至る室町後期の此道の名人以下の働に負ふ。而して此等諸茶人の背後にあり、茶道の興成に與つたのは時の市民的精神の他のものではない。此の點より茶道の全發展の上に、此の時期の意義を、初期として解くを得よう。

初期の茶湯が一般的に市民の生活に持つ意義は、先づ會遊に於ける協同示現にあつたとすべく、特に時人の角逐せる目的的利益的活動よりの特殊なる遁離が、市中の隠としての茶屋・山里の裡に塵外の別境を建てしめるに至つた。而もそれは個性的異質的成員よりする協同であり、却つて個性が協同の上に意義を持つてゐたことは、就中作意と目利に於いてする主客の問答的相互了解の強調にもよく察せられる。斯く市民的個性の協同的發揮に一座の建立を俟つ茶湯は、從つてそれに於ける數奇の表現に、荷擔社會の精神趨向を、茶道の道の(實踐による)不斷の開拓の進行を、見得よう。

その主展開を簡述せば、茶湯に直ちに考へられる佗の懷好は當初の市民的茶湯に於いては寧ろ微見に苦しむ處、却つて物毎結構なる世界への憧憬、またその實現たる限りで、茶湯は彼等の生活に入つてゐる。それには單なる市民的奢侈の發揮のみならず、市民の持つ新貴族的な精神に強く根ざすものであり、他迄榮花結構の世界を前提、規範とし、それを持つ關係に於いての生活昂昇を喜ぶ。茶室に特に床を設け、それに飛(ま)るべき名物への尊敬、そして、先づ、専ら、臺子の茶湯好尚の所以を此處に考へ得る。

併し纏て名物の廢類、新に數奇道具の設定を持つ如く、初期茶道の發展は此の心地に低徊せず、これを前提とし、否定して、獨自な新を樹てるにある。道具を結構にするより遂に心の綺麗を尙ぶ外向より内求、客より主體的态度への轉回を最も重要な事として持ち、貴庶の隔別を意識し、専ら貴族生活的軌範に依進する二元的觀念を超克して、自由な自己立法を獲る一元的立場への解放が、就中、紹鷗、更に利休、によつて達成される。佗の覺證も實に此の過程に於いて漸次進むを認められよう。此の最後の問題の一層具體的な解明こそ、茶道史に取つて最も切要であるが、私はこれを次日の課題とし、更にそれに堪ふべく自らを修めたい。

日本原始文化研究序説

鴛田 忠正

——特に銅鐸畫に關する二三の考察——

私が本論文に於て意圖する所は所謂考古學の學問性の再検討にあつたのである。私は考古學が従來と同じ立場を持つ限り考古學の學問性を否定せんとするものである。

考古學の *an-und-für-sich* としての考古學は歴史學でなければならぬからである。

かゝる立場から所謂遺物そのものを取擧げて、遺物は如何に解すべきかを敘述せるものが本論文である。則ち私にとつては將來の原始文化研究の一里塚たらしめんとする習作が本論文なのである。

全篇は主論文、補助論文、圖録の三部作であり、主論文は序論と本論に分ち、序論に於て従來の考古學的研究が如何なる點に於

て舊時代の所謂科學的研究法の失敗を物語つて居るかを明らかにし、現代の歴史學はより廣い意味に於て考古學的遺物さへも、ペトオベンの交響樂レコードと同じく其れ自體では全く無であるが如何にして有とするかの問題の解明に向つて所謂哲學的人間學的研究法こそ我等に委ねられたる唯一の歴史的理解の方法である事を明らかにしたのである。

本論に於ては序論に説ける哲學的人間學的方法論を以つて先づ遺物の中に生き死滅せる所の人間を發見すべく、銅鐸畫の研究に向つたのである。

此の物言はざる銅鐸畫が私に話しかけて呉れた時私はどんなに喜んだ事か、今思ひ出しても感激の涙禁じ得ぬものがある。

銅鐸畫は其の本質としてリズムを持ち、横位置に於て對象を把握して居るのは一に全くリズムを本質とする此種繪畫の特種法であり、對象が生動せる動物に限定されて居る所に彼等の生命の本質的構造はリズムであると斷定し、ヨーロッパ石器繪畫との比較考證から我が銅鐸畫こそは彼の有名なアルタミラの壁畫と同列に置かるべき日本の原始繪畫なる事を斷定したのである。

かゝる生構造が所謂古墳文化とは全然相容れないものである事も傍證として記述して置いた所である。

殊に大橋氏鐸に見ゆる高倉式家屋の圖は私に此の見解に決定的なものを與へたものとして特筆すべきものがある。

其れ自身リズムを持たず、動物でないものが何故に此處に描かれたかの問題こそ本論文の核心であると私は特記したい。私は先

に原始繪畫の本質はリズムであり、それは彼等原始人の生構造そのものに於て理解さるべき事を云つた。かゝる立場に於て家屋圖を見れば、高倉としての特種構造は穀物倉として、彼等の豊年踊のリズムの中に溶け込んで、踊る彼等の姿の中に家屋圖に附與されたリズムを我々は感知するのである。

かくて私は銅鑿畫の存在を原始人の心情に於て追憶として捉へ、此の見地から従來の銅鑿の型式論にふれた、全然反對のものが出來ると説いたのである。

鎌倉時代神道理論の性格

清原 宣雄

— 伊勢神道の成立 —

鎌倉時代に於ける神道理論に就て考へる時、我々は先づ次の如き問題に逢着する。即ち、佛教本來の性質としてそれは日本に於て神道と習合する以前インドや支那に於てインド教、道教等の他宗教と如何にして習合したか。而してその有する本地垂跡觀なるものは日本に於て平安朝時代に神道と習合して日本独自の本地垂跡説を發展させたがそれは次の時代に如何なる問題を殘したか。即ちその本地垂跡説は次の鎌倉時代に前代と異り神道家の手に依つて如何なる展開をなすか。

此等の問題を日本神道史上最も著しい伊勢神道の上に考へて見んとするのであつて、外宮尊嚴強調の爲の緣起的神道として發生した伊勢神道が前代と異つて日本の情意の下に哲學的神道説を樹立して行く經過の中に見られるものは鎌倉時代神道理論の性格である。

一體鎌倉時代は哲學的神道の勃興期であると言はれる。而してこの時代に於ける伊勢神宮への國民的信仰は神宮をして宗教化せしむる事となり、「神道五部書」以下の緣起的神道の形をとつて度會神道の發生を見るに至つた。而も彼等に與へられた哲學的知識はその理論をして、佛教的であり儒教的であり、老莊的である性格を規定し、且封建制度社會の下に於て彼等が養はれた思考の形式は平安朝時代以來の本地垂跡説への對立意識の上に立つものであり乍ら、尙且反本地垂跡説としての思考の形式としては異なる所なき道を辿らしめたものであつた。

而もその理論の發展し來るにつれて國史への深き關聯の下に實際的道德的態度を著しく強調し乍ら佛教思想や支那思想を綜合する事に依つて、佛教的色彩と支那思想と國史の主觀的理解は完全に融合統一されて、それらの一面的偏狹性はこの伊勢神道の包括的なる止揚によつて一層大なる視野の下に立つ神道理論へと展開して行く事となつた。

而も世界の大元を神として理解する神道的な立場は從來の儒佛に對する觀念への反省の結果であつて、この儒佛へ對して神道の權威を主張する事は國家意識國體意識成立への道であつて、かゝる神道意識は亦中世神道に極めて重大なる一つの性格を加へるものであつた。

而してその發生に於て外宮尊嚴の爲の理論であつた度會氏の主張が、かゝる哲學的神道へと展開して行く過程に見られるものはその時代の社會的狀勢、封建制度の思考形式による鎌倉時代神道

理論の性格でなければならぬ。

而も一つの目的の爲に樹立された「神道五部書」以來の外宮の祭神を國常立尊とするこの神道の主張は廣く一般に信じられる事によつて、その後に来る神道理論へ甚大なる影響を及した點から見ても度會神道の我國思想史上に占むる位置は甚だ大であると言はなければならぬ。

近世初頭に於ける遊藝の研究

林屋辰三郎

私は此題下に室町・桃山・徳川初期の三時期を考へ、時代との關聯に於て遊藝が本質的に如何なる變化を示すかを見ようと試みたのであるが、其爲に夫々の時代の遊藝に就て特に問題となるべき個所を捉へて考究を加へ、出來得る限り多方面からその姿を浮出さす事に力めたのである。

先づ第一章に於て室町期の戸外遊藝として「能」及「狂言」を擧げ、之につき若干の問題を捕へて、要するに前者は理想的世界を畫く事によつて現實を離れんとする遊藝の一つの型であり、後者は却つて享樂によつて現實そのものを忘れしめんとする遊藝の他の一つの型であつて、共に現世超越の傾向に於て相通ふもの、あるを考へた。第二章に於ては更に勸進能についてその意義・構造・内容及興行地域を検討し、特に「手猿樂」に對しては「素人猿樂」といふ新なる意味を推測したが、是等によつて勸進能が能の民衆化といふ點に於て持つ意味の極めて深い事を強調したのである。第三章では室内遊藝に問題を移し、連歌・茶湯・插花・香道等の一群と楊弓・圍碁・將棊等の一群とに於て、戸外遊藝に於て見たと

同様の二つの型を見得るとし、茲では特に連歌と楊弓について二三の私見を加へた。第四章に於ては近世都市生活に於ける情緒をよく示すものとして風流・踊・念佛踊・大燈籠・さては夏祭等を擧げ、是等の宗教的意味をもつものが民衆娛樂化する過程を當時の記録の方面から跡付けてみた。又鑛山都市と遊藝との關係をも顧みて文章を導いたのである。第五章に於ては桃山期こそ上述の室町期の遊藝が待望せる彌勒世界の出現が實現した時代であつて、茲に現世超越の傾向は棄てられ現世謳歌の傾向の著しく現はれた事を考へた。夫に就て鷹狩・茶湯・能につきその彌勒が英雄に置換へて考へられてゐた事を示した。特に此時代の能については、能の留帳に統計的考察をなし時代の好尚が演劇的なものに向ひつゝあつた事を實證して文章を誘導した。第六章には先づ歌舞伎踊についてその由來を明かにしその風姿、及躍歌に於て本質を窺ひ、次に歌舞伎劇については種々の立場から考察したのであるが、特に「花道」が能舞臺の「橋懸り」よりもむしろ「勸使段」に近い事を指摘し「花道」と「勸使段」の性質によつて能と歌舞伎の精神的相違を憶測し、又「評判記」に就てはその位付を君繁觀左右帳記相阿彌本の位付と考へ併せ、是等によつて中世遊藝と近世遊藝の本質的差異を暗示せしめた。最後に「芝居」「遊里」に現はれた個人技藝讚美の傾向がやがて「藝を身につける」といふ風な考方を導き、元祿時代が近代遊藝の眞の誕生期となつた事を述べて結びとした。

私は右の如き題名の下に徳川時代の新田開發、特に大阪川口新田を中心にした町人請負新田に就て若干の考察を試みたのである。私のこの研究の手がかりとなつたものは越後國地割制度や徳川期の所謂、地方に關する書に散見する「古新田」なる語であつた。私はこの語と川口新田に關する文書に出て来る古田畑、古田等とを關聯して新田の發達と變化の見られんことを豫想した。次にこれを新田の構造を通して窺つたのである。即ち、町人請負新田はその初期に於ては地主の手先たる支配人と小作人との二つの成員よりなり、普通の村に於けるが如き庄屋、年寄、組頭、惣百姓等を有せないが、時代を経るに従つて、兩田に共通な郡中惣代、更に亦、年寄、組頭等の庄屋以下の村役人、本田に特有な五人組制度の發生と成立を見るに至つたことを洞察した。

次に、これを武士、即ち代官の小作農民に對する態度に於て窺ひ、開發當初にあつては特に小作人を地主の專制的支配下に置いてあるかの如く見えるが、これも時代の推移と共に、田畑賣買の禁、逃散・徒黨の戒、邪宗門の禁止等、五人組帳に見られると同じ様な禁令の公布されてゐる事實を指摘して、こゝにも亦、先に述べたと略ぼ同じ様な傾向があることを知つたのである。

最後に、近頃、問題となつてゐる町人請負新田の小作關係に就て若干、考察を試みた。尤も、この立論の根據とした小作證文は「時」を省いてある爲に、その史的變遷を究めることを得ず、専ら、

斷面的に、固定的になつたのはやむを得なかつた。先づ、その小作の種類に永小作のみならず、年期小作、出(入)小作のあることを指摘し、次に、小作證文と五人組帳とを小作米乃至年貢の納付期限、及びそれ等を未納せる場合の處分の二條項を中心に比較、對照して、新田の小作關係が契約的なるに對して本田のそれが誓約的なることを見て、前者は既に前期資本主義精神の萌芽を見た。而も、それがなほ封建的色彩の濃きものなることの看過すべからざることを併せ考へて、近世封建制下の町人の生活を如實に語つてゐることを知つたのである。

以上述ぶる所は拙稿の要約に過ぎないが、これを作成するに當つて絶えず教示と鞭撻を惜まなかつた日本經濟史研究所の江頭、寺尾兩先輩、國史研究室の前橋先輩その他諸兄に深甚の感謝をさしげる。

徂徠に於ける近世文化の反省と其の意味

今中 寛司

江戸の萩生徂徠が享保改元前後、其の主著辨道・辨名を以て古文辭の學を創唱せる所以のものは、當代の儒者への攻撃と特に政治・經濟的な現實社會への反省とに於てである。武と文・封建と江戸集注主義・地方と都府・理念と實證等凡ゆる方面に於ける二元的文化現象は享保時代に於ける幕府基礎確立と共に卓越し來たる徳川封建社會の性格であり、かゝる意味に於ける多様な現實への反省は、民間儒者として將又柳澤吉保を始め、綱吉・吉宗將軍等の顧問官儒として、徂徠が有する特に豊富な生活經驗に深く根

差してゐるものと云へる。徳川幕府開設以來徳川封建制度の神學としてある朱子學を徂徠が否定せんとする事は儒學そのものに對する如上の反省に外ならず、徂徠が所謂詩・書・禮・樂は、朱子學的人間規定に見る規範的意志的人間のみならず、詩文を通じて感情的人間をも反省さるべしとする主張である。即ち徳川時代初頭に於て朱子學が彼岸より取りもどした人間は徂徠に於ては更に二元的現實社會に生活する事に依つて、より豊富な人間として反省される事である。而して其の方法としての復古の學は我意を去つて古文辭を「習」する事であり、明の李攀龍・王世貞に道統を取る事であつて、結局對象との没我的結合の強調である事は、徳川時代儒學一般に通ずる性格である。一方徂徠がかゝる様式を「習」として反省せる點に思想家としての使命が有り、他方「習」の對象を「事」と「辭」として主張する點に思想的展開が見られる。「事」と「辭」とは生活の二様式を意味すると同時に其れ等は「物」として觀じられ、其所には實證精神と江戸幕府が其の出目の故に有する叙事的性格が伺へる。徂徠の經世論は正しく實證精神に立つものであるが、其の指導原理には尚ほ強い儒學的理念の存在がある。自然科學的實證を否定し、日常生活へのプロテスタント的效果を重視して、儒學的理念の世界と實證的實證の世界とを共に認めんとする、ポジティビズム的とも云ふべきより廣い世界への反省である。かゝる反省に於ては自らの世界觀を固執する一方、自らの學的發展途上否定して來た、朱子學を始め佛・老・莊、更には政治・經濟等の多くのものの個別性を是認する。他方官學ならざる該

國學派の活動は又諸藩の個別性自覺の過程でもある。かゝるより廣い世界への反省は徂徠に於ては人間個々への關心に進められる事に依つて天才教育となり、護國門下は多種多様な人材を以て充滿される。其所には人間の個別性に對する深き反省がある。かくして徂徠の思想家としての史の意味は其の多方面な學問に於てある。

平安朝草假名書道發達の精神史的考察

島 道雄

世界が人間に如何に働きかけたか又人間が世界に如何に働きかけたかの様々の形式の歴史的研究をめざし、印象と表現の交互作用の中に生れて來る精神形式を一の全體として了解描寫する所の精神史の一細部として「精神史」としての「藝術史」とも云ふべきものゝ考究の必要なるは勿論であり、且これらの部分史こそ一般的精神史への通路でなくてはならぬ。而して我國及び支那の藝術中に書藝の占める地位が極めて重要なものであるからには、日本精神史への一課題として「精神史」としての「書藝史」も考究される必要がある。かゝる意味に於て平安朝草假名書道發達を精神史的考察の對象として取上げ、高野切三種及びそれに類似する一群の草假名に於て見られる長保寛弘年間ものを中心とし、西本願寺卅六人集及びその類似のものによつて代表される元永保安前後のものを鎌倉時代への過渡の様式を示すものとして之と對比しつゝ、考察を進めんとする。

その様式の一特徴として線條形態の纖細矮小が指摘されるが、

これは却つて技巧的困難を意味するから決して藝術意志の弱さを示すものではない。又書藝は時間性運動性をもつ造型藝術とも云ひ得るが、平安朝中期草假名の運動性は決して過激なるものではない。靜止に於て調和的に表出された運動である。これは一面自我の過度の表出を好まず「まことのすぢ」を尊重する藝術精神の所産であり制作者と觀照者との調和をもくろむものである。

又當時の假名は消息卷物册子屏風等にかゝれて日常生活に組入れられて存在しその藝術的價値の故に實用的價値をもち、前述の矮小性調和性は一面このためのものである。それは又文藝と造型藝術との綜合體でありつゝ繪畫工藝等と綜合的に存し紙の如き素材の美に對しても調和的である。こゝでは藝術美と自然美の限界が意識されるよりは兩者の綜合調和に於ての美が追求される。草假名が女手と呼ばれるに反して片假名がその範疇外に置かれる事はその發生的意味にもよるがまた兩者の視覺性の差の故でもある。後者が漢文訓讀用として前者が國文書寫用として用ひられた事に於て思はれる日本的なものと女性的なものとの結合は、一面我國の風土性より他面藤原氏專權の由因よりして考へられる事が出来るであらう。

封建制度再編成と都市

—商業都市界に就て—

岡本 良一

我が國に於ける中世大都市たる京都・奈良・鎌倉等は何れも土地經濟の地盤の上に生存を續けた消費都市であつたが、新興界は逆にその地盤を蠶食する事に依つて發展した。

一、土地經濟はなほ支配的であつたが、明・朝鮮・琉球等との通商は漸次商品貨幣經濟を浸潤させて、新舊兩勢力の交替が起りつつあつた。地理的條件に恵まれた界はその過程に於て一方的に富を集積し、その商業・高利貸資本は上下各層間に著しく進出し、土地經濟を益々破綻せしめてみた。更に遣明船發港地としての地位を、應仁の亂に依り偶然的にはあつたが、必然性をもつて兵庫より奪ひ、商都としての躍進に拍車をかけた。封建諸侯等の統制にかゝるこの貿易は、封建的消費を助長するのみで支配者の思惑とは反對に、土地經濟の矛盾の擴大再生産の役割をしてみた。

二、産業部門の全國的未發達の下に於て、界には機業・鐵炮工業にやゝみるべきものがあつたが、なほ手工業が支配的だつた。機業では最早桎梏化する座組織はみられず、商人が之に投資する家内工業の域に進みつつあつた。彼等は更に鐵炮工業にも參加したが、戰國の風雲は寧ろ製作者が直接諸侯に封建的隸屬をする事により大をなした。然もそれ故にこそ大なる制約を蒙り、封建制再編成の完成に役立つ結果をもたらずに止まらざるを得なかつた。

三、兵士役金納・地下請の成立等は封建領主よりの自治權の獲得であつたが、他面階級分化の反映であり、遂に會合衆の成立をみた。斯る一部上層富民階級は、その地主性・下層階級の壓迫及び諸封建領主との提携等により、彼等自身の進歩性は稀薄であつて、却つて自らも集團的封建領主化せんとしてみたのである。併しこれも當時の一般的社會經濟的制約の故にであり、彼等と雖もなほ

本質的には土地經濟の解體に有力に作用してゐたのは勿論である。

四、信長及び彼の後繼者達は、商業都市を破壊しては目的を達し得ず、直轄地となす事に依つて財政的基礎とした。城下町の發達・鐵國の斷行は堺として内外市場を喪失せしめ、片々たる一都邑化たらしめる結果を招來した。而もこの二政策こそ徳川三百年昌平の基礎ともなつたのである。即ち、大阪を初めとする諸城下町の經營は土地經濟と貨幣經濟の併用政策であり、鐵國は破壊的貨幣經濟の侵入を禁止すると共に、キリスト教の絶滅、更に西南外様諸侯の富裕化の防止等の意義を持つてゐたのである。

豫饗會 二月八日(火)午後六時より寺町三島亭にて三回生豫饗會を催した。西田、牧、藤、源、出雲路の諸先生以下國史二回生一同出席し、九時頃會を閉じた。

○西洋史讀書會

卒業生送別豫饗會 昭和十三年二月五日午後六時より鳥初にて開催、時野谷、原兩教授、鈴木講師を始め十七名出席、和氣黨々裡に十時前散會。

○地理學談話會

例會 十二月十八日午後二時より 於實習室

- 一、臺北盆地の開拓と都市的繁榮の發生 西村 睦男
- 一、フリドリヒ・マルテ 野間 三郎

卒業論文報告談話會 十三年二月十二日午後三時より 於實習室

談話の内容は左の如くである。

天草諸島の人口

伊藤 博

—人口の地理學的意義についての一考察—

天草と云へば、誰しも天草女を想起する。「からゆきさん」の間にあつて、天草女の風評高き所以は何によるものであらうか。天草女の母胎をなす天草諸島の人口を通して天草女の由來を考へ、天草の特異性を把握する事は可能であらうか。然りとすれば、其は人口が地理學の對象として、地域性を内在せしめてゐるものであるから、人口を通しての地理學的研究は此を具現するにあると云はねばならない。

本論文に於いて、人口の歴史的推移を眺め、人口の状態の安定度を考へ、その移動、増減に觸れた際も、筆者の意圖は天草の特異性を追求すると共に、人口地理學の人口規定は如何なるものであるべきかを考察するにあつた。その意味に於いて、本論文は天草諸島の人口を通して筆者の地理學的認識の發展過程を示したものに過ぎないのである。

三島群島の人口に就て

佐伯 英二

人口現象は社會學或は統計學に於ても取扱はれるが、土地地域を構成する要素として取扱ふ處に地理學の使命はある。人口現象は又自然的人文的諸條件の総合的な徵表である(小牧實繁・先史地理學七六頁)から人口現象の地理學的説明は土地・地域の構造があらゆる角度から分析されて後始めて可能である。この意味で本文は全く豫察的なものである。

本地域の人口現象が外海の島嶼と著しくその趣を異にするのは一に瀬戸内なる恵まれたる自然的地位とその上に立つ近代工業に依つて規定されるからである。然し反面本地域が農業を以て經濟生活の主體とし乍ら耕地に恵まれざる事は出稼による人口壓の緩和となつて現はれる。季節の出稼の主なるものには鹽田勞働者・杜氏・石工・漆器・行商等がある。漆器行商は大島の渦浦村（標名のみ）民約一四〇人に依つて二月中旬から八月中旬まで及び九月上旬より一月中旬まで春秋二回九州一帯及五島、對馬方面に行はれる。九州方面は米・蠶の收穫期、五島・對馬方面は魚獲期を見計ひて行商する。

臺灣北部の茶に就いて

下村 數馬

汽車が臺北州から新竹州に入らんとする頃、我々は土壤の色が赭色に變化する事に氣付く。有名な赭土層の桃園臺地なのである。沿線の平場面は大部分水田で、驚く程多くの貯水池がある。次いで、喬木の少い臺地面上に灌木が井然と植ゑられてゐるのが注意をひく。之が茶畑である。そして此の景觀は汽車がやがて臺北州に入らんとする所迄緻く。世界的な烏龍茶を持つ臺灣茶は、此の臺地を中心として發展して來た。此の事は兩州の粗製茶生産量が全島の九八%を占める事を見れば明かである。而も近年、烏龍茶、包種茶に加ふるに紅茶の躍進がすばらしい。然らば此等優秀茶の根本となるものは何であるかと云ふに、勿論製茶技術の秀れてゐる事もあるが、それより重要なものは茶樹品種の特異性、優良性であると思ふ。故に筆者は此處に重點を置いて、地域的に

云ふなら殆んど臺北・新竹の兩州で占める臺灣茶を地理學的な見地から述べて見たいと思ふものである。

北攝の經濟地理學的研究

中森 増三

此所に北攝と云ふは攝津の北部一帯の山間にして、地形的には高槻・六甲の方向に走る折裂線に依つて大阪平野と判然と區別せられてゐる。この土地に於ては、自然の制約は長く住民の經濟活動をさまたげてゐた。併し天然の氣候を利用して行ふ寒天の生産は古くから開けてゐた。近時、農村の疲弊と云ふ内面的事情に促進されて、農業經營は漸次多角化しつつあるのであつて、就中氣候を利用して蔬菜の抑制、促制栽培が盛んになりつつあり、又交通の發達も多角化の一因として見逃す事は出來ない。即ち大阪・神戸等の大都市間への連絡が容易になつたため、都市向きの蔬菜類の栽培は拍車をかけられてゐる。かくて從來孤立的立場にあつたこの山間土地が都市と密接な關係を持つに至り有機的統一體の中に溶合しつつあり、又、粟とか寒天の外國輸出も行はれるに至り、その經濟的地位に重要性を加へて來た。

出雲海岸地帯に於ける水産地理學の考察

並河 由則

出雲海岸地帯を水産地理的に見て美保關町より大社町に至る北浦海岸、園村より田儀村に至る簸川郡西部海岸、及び中海、宍道湖の四區に分けられると思ふ。

北浦海岸は隠岐へ緻く魚礁を豊富に持つ大陸棚に臨み且近海には寒流暖流相交り従つて魚族も多いので村の生活は主として漁業

に依存してゐる。海岸近くまで相當の水深を有するので回游魚族を沿岸近くまでもたらずので、大罾網、大敷網の如き定置漁業が發達してゐる。この地域の村々は漁業上好條件に恵まれるも背後の山脈にさへぎられ漁産物の運搬に不便を受けてゐるがその點惠曇村大社町はめぐまれてゐる。篠川郡西部海岸は田岐村を除く以外全く副業的で産額も少なく遠淺海岸を利用して地曳網を曳く程度である。中海は内灣性の進んだもので半鹹水性の魚族多く底質の泥土なる關係等より地曳網が主要漁具になつてゐる。そして赤貝の養殖も盛んである。宍道湖は東部に於ては半鹹水性魚族に富むも鯉の如き淡水性魚族が多い。投網が最も多く使用され養殖放流も盛んに行はれ養魚場である。

臺北市の地理學的研究

西村 陸男

乾隆六年、「艋舺渡頭街」として初めてその名を史書に印刻した臺北市は、その幼き姿を臺北盆地の中心の市場町として現象せしめ、肥沃なる盆地の農村購買力は、やがて當市をして「一府・二鹿・三艋」と謳はしむる北臺灣隨一の都會に育て上げた。同治初年臺灣茶が獲得した輸出品の地位は、その再製茶工業を當市に賦與せる事によつて、最早當市をして盆地内中心的都市としてのみに止らしめなかつた。明治二十八年、日本の領臺はこゝに劃期的なる新しき生命を當市に吹込み、その政治的、學術的都市としての地位は、それが今迄享受せる經濟的都市としての地位に更に美はしき文化の衣を着せたものと云ふ事が出來よう。現在の都市的機能は將にこの點に出發する。即ちそれは單なる都市ではない。

相異る民族が雜多に奏でる諸々のトーン、而もそれが全體として耳朶を打つハーモニー。臺北市の分析と綜合も之を無視しては意味を持たないであらう。

卒業生饗餞會 二月十二日午後六時より、於石段下鳥岩樓。

出席者 小牧助教、藤田講師を始め田中、瀧本、宮川、渡邊、山口、朝永、野間及び卒業生二回生一同、一回生川上君。水煮の鍋をかこんで例により飄々ある和氣と湯氣に包まれて歡談、諸先生先輩の激勵送別の辭もあり、記念撮影に一騒ぎあつて散會。

會

六年

○評議員會

三月二日評議員會を開催、原・時野谷・那波・小牧・梅原の諸評議員參集、委員の異動、會則の變更、其他一般會務等に就いて協議した。

○委員の異動

上記評議員會の議に依り、前年來會務に盡力せられたる前川・小野・内田・中山・内藤・中村・田中の諸委員は辭任せられ、新に小澤吉見・稻葉慶信・小林行雄の三氏を委員に依頼した。

○會員 勳靜

○入 會

東京市品川區上大崎一ノ五〇六

酒井三郎氏

(右 原隨園氏紹介)

京都市中京區東洞院丸太町下ル

守屋孝藏氏

京都市上京區河原町荒神口上ル西入

小川茂樹氏

京都帝國大學文學部考古學教室

小林行雄氏

(右三氏 梅原末治氏紹介)

京都帝國大學文學部地理學教室

野間三郎氏

(右 小牧實繁氏紹介)

東京市杉並區方南四三〇

田山信郎氏

(右 赤松俊秀氏紹介)

京都帝國大學文學部史學科二回生

江藤悦三氏

◇轉 居

東京市芝區二本榎西町二番地

大久保利謙

東京市澁谷區原宿三丁目一七〇番地十四號

鍋島直康

◇退 會

岸本繁造氏

Edwin Reischauer

○寄贈交換圖書雜誌目錄 (三月現在)

圓谷 弘著 支那社會の測量

著 者

史學科研究年報 第四輯

臺北帝國大學文政學部

東方學報 東京第八册

東方文化學院東京研究所

史學雜誌 四九ノ一二一

東大史學會

歷史地理 七ノ一・二・三

日本歷史地理學會

社會經濟史學 七ノ九・一〇・一一

社會經濟史學會

史學研究 九ノ二

廣島史學研究會

史學研究 七ノ四

大塚史學會

人類學雜誌 五二ノ二二、五三ノ二二

東京人類學會

考古學雜誌 二八ノ一・二・三

考古學會

文 化 四ノ一二、五ノ一二・三

東北大文科會

國學院雜誌 四四ノ一・二・三

國學院大學

史迹と美術 九ノ一・二・三

史迹美術同攷會

經濟論叢 四六ノ一・二・三

京大經濟學會

社會學徒 二ノ一・二・三

社會學徒社

龍谷史壇 二一

龍大史學研究室

國史學 三三

國史學會

臺大文學 二ノ六、三ノ一

臺大文學會

國民精神文化 三ノ三

國民精神文化研究所

史 觀 一四

早大文學部

民族學研究 三ノ四、四ノ一

日本民族學會

西洋史研究 一二

西洋史研究會

皇 學 五ノ三

神宮皇學館々友會

東洋史研究 三ノ一・二・三

東洋史研究會

中國文學月報 三四・三五・三六

中國文學研究會

善隣協會調查月報 六八・六九・七〇

善隣協會

以可留我 一ノ六

鵜故郷社

歷史學研究 七ノ一二、八ノ一二・三

歷史學研究會

京城帝大史學會誌

一一二

京城帝大史學會

軍事史研究

三〇一

軍事史學會

哲學研究

一一三〇・一一三三

京都哲學會

紀州文化研究

一一〇・一一三三

紀州文化研究所

立正史學

一一〇

立正大學史學會

イスラム

一一

イスラム文化協會

長崎談叢

一一

長崎史談會

T'oung Pao (通報)

三三三・三三四

ペリ オ氏

Harvard Journal of Asiatic Studies

一一・三三四

Harvard-Yenching Institute.